

阿仏御房の尼御前ごぜんより銭せに三百文。同心なれば此の文ふみを二人して人読によませ聞てきこしめせ。

単衣ひとえぎぬ一領、佐渡国さどくにより甲斐国かいのくに波木井の郷の内の深山まで送り給ひ候たひ了おわんぬ。法華經第四法師品に云はく「人有こつて仏道を求めて一劫の中に於て合掌して我が前に在あつて無数の偈を以て讚めん。是の讚さんぶつ仏に由るが故に無量の功德を得ん。持經者を歎美せんは其の福復また彼に過ぎん」等云云。文の心は、釈尊ほどの仏を三業相應して一中劫が間ねんごろに供養し奉るよりも、末代悪世の世に法華經の行者を供養せん功德はすぐれたりとかれて候。まことしからぬ事にては候へども、仏の金言にて候へば疑ふべきにあらず。其上妙楽大師と申す人、此の經文を重ねてやわら和げて云はく「若し毀謗もきぼうせん者は頭七分こうべに破れ、若し供養せん者は福十号に過ぎん」等云云。釈の心は、末代の法華經の行者を供養するは、十号具足しします如來を供養したてまつるにも其の功德すぎたり。又濁世じよくせに法華經の行者のあらるなんを留難をなさん人々は頭七分破にわるべしと云云。

夫日蓮は日本第一の似非ゑせ者なり。其の故は天神七代はさてをきぬ。地神五代又はかりがたし。人王始まりて神武より当今まで九十代、欽明より七百余年が間、世間につけ仏法によせても日蓮ほどあまねく人にあだ怨まれたる者候はず。守屋が寺塔をやきし、清盛入道が東大寺・興福寺を失ひし、彼等がまさかどさだ一類は彼がにくまず。将門貞たうが朝敵となりし、伝教大師の七寺にあだ怨まれし、彼等もいまだ日本一州の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷の四衆にはにくまれず。日蓮は父母・兄弟・師匠・同法・上一人・下万民一人ももれず、父母のかた敵きのごとく、謀反強盜にもすぐれて、人ごとにあだ怨をなすなり。されば或時は数百人にのられ、或時は数千人にとりこめられて刀杖の大難にあう。所ををわれ国を出ださる。結句は国主より御勸氣二度、一度は伊豆の国、今度は佐渡の島なり。されば身命をつぐべきか種んてかくもなし、形体を隠すべき藤の衣ももたず、北海の島にはなたれしかば、彼の国の道俗は相州の男女よりもあだ怨をなしき。野中にすてられて、雪にはだへをまじえ、くさをつみて命をさそぶえたりき。彼の蘇武が胡国に十九年雪を食ふて世をわたりし、李陵が北海に六箇年が岩窟んくつにせめられし、我は身にてしられぬ。これはひとえに我が身には失なし。日本国をたすけんともひしゆへなり。

しかるに尼御前ごぜん並びに入道殿は彼の国に有る時は人めををそれて夜中に食ををくり、或時は国のせめをもは憚からず、身にもかわらんとせし人々なり。さればつらかりし国なれども、そりたるかみをうしろへひかれ、す進むあしもかへりしぞかし。いかなる過去の縁えんにてやありけん、をぼつかなかりしに、又いつしかこれまでさしも大事なるわがおとこ夫を御つかいに遣てつかわされて候。ゆめか、まぼろしか、尼御前ごぜんの御すがたをばみまいらせ候はねども、心見をばこれにとこそをばへ候へ。日蓮こいしくを恋はせば、

常に出づる日、ゆうべにいづる月ををがませ給へ。いつとなく日月にかげをうかぶる身なり。又後生には靈山浄土にまいりあひまひらせん。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。

六月十六日
佐渡國府
さどの国のこの尼御前

日 蓮 花 押